

高校美術における主体的な学習参加を促す

一人ひとりにあった支援のあり方

愛媛大学大学院 教育学研究科 特別支援教育専攻 特別支援教育コーディネーター専修 長尾秀夫 研究室
高知県立高知北高等学校 教諭 土居内香江

1 はじめに

「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」¹⁾によれば、通常の学級に在籍する児童生徒のうち「知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示す」と担任教員が回答した児童生徒が全体の6.5%いると報告されている。つまり、支援を必要とする児童生徒が小中学校の通常の学級に1学級数名いるということである。

「平成23年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」²⁾によれば、高校の不登校の生徒に対して「指導の結果、登校するまたはできるようになった生徒」に特に効果があった学校の措置として「授業方法の改善、個別の指導など授業がわかるようにする工夫を行った」、「様々な活動の場面において本人が意欲を持って活動できる場を用意した」という項目がある。授業が理解できることや意欲的に取り組むことができる授業が生徒への必要な支援であるということが示されている。

そこで本研究は、高等学校の美術の授業において、学習参加に困難さを抱える生徒への支援を通して、主体的に学習参加をすることができる支援のあり方やその課題を明らかにすることを目的として実践研究を行った。

2 研究の方法

対象は美術選択者のうち、学習参加に他の生徒より困難さを示した3名であった。3名はそれぞれ、集団が苦手な課題を理解するのに時間がかかる生徒A、落ち着きがなく私語が多い生徒B、質問回数が多く課題提出に時間がかかる生徒Cである。

本研究では、美術の授業の6課題の取り組みについて検討した。6課題の制作期間をⅠ期からⅤ期に分けた。Ⅰ期は4月12日から6月3日までとし、「色彩構成」と「風景画」の課題であった。Ⅱ期は6月13日から7月19日とし、「切り絵」の課題で、約30種類の絵の中から自分がやってみたくらいものを選んだ。Ⅲ期は8月29日から10月3日とし、「公募作品の制作」の課題で、それぞれの部門ごとに机を集めて課題を仕上げた。Ⅳ期は10月4日から11月11日とし、「デッサン」の課題で、教室の3カ所に準備した空き瓶やリングなど複数の異なるモチーフを自分の決めた場所で鉛筆を用いて描くものであった。Ⅴ期は11月14日から12月19日とし、「ドライポイント（凹版画）」の課題であった。

平成25年5月から平成25年12月まで、筆者が美術の授業の「支援者」として授業者から生徒の様子を聞いたり、授業の様子を見学した。その内容を授業者と生徒とのやりとりがわかる「コミュニケーション記録」にして生徒の実態を把握し（5月から6月）、対象の生徒が授業参加しやすい支援の手立てを授業者と支援者が共に考え、授業者が実施した（7月から12月）。

12月には、①先生の説明で授業内容が理解できたか、②課題に楽しく取り組めたか、③満足できる作品ができたかの3点について、自分が作成した5つの作品を見ながら授業アンケートを行った。

集団学習場面での有効な具体的支援については、長尾³⁾が「教育支援の7つの工夫」を示している。第1の工夫は、子どもの興味関心を大切にして、学習内容にできるだけ取り入れる「学習内容の工夫」、

第2にどのくらいの人数が適当であるかの「集団構成の工夫」、第3には教室の広さやどの位置に座席を置かなどの「学習の場の工夫」があげられている。第4は、一人ひとりに合ったわかりやすい「教材/教具の工夫」をすること、第5に、いつ・どんな言葉を必要に応じてかけるかの「かかわりの工夫」、第6にそれぞれに応じてわかりやすい示し方や手順などを考える「提示の工夫」があり、これらは具体的な教育支援の中核をなすものであるとしている。第7の工夫は、子どもとのやり取り記録である「コミュニケーション記録」を残すことで成果の過程が子どもや支援者にわかるようにする「成果のわかる工夫」が示されている。これを参考に授業者と支援者が美術の授業での具体的支援を考え、実践した。

3 研究の結果

(1) 生徒Aへの授業者の支援

生徒Aは、生徒全員に対する一斉の説明だけでは理解が難しく、課題にとりかかることができない様子であった。また、他の生徒がいるところへ行って準備や片付け、課題をすることができなかった。そこで、生徒Aが授業参加しやすい支援の手立てを支援者と一緒に考えた。

1 つめの準備への支援は、教室の前方に授業が始まる前から必要なものを準備し、他の生徒が準備を始める前に準備してもかまわないこととした。2 つめの、課題の取り組みについての支援は以下のように行った。色彩構成の課題は授業を欠席したので、担任を通じて連絡し、放課後に課題を仕上げるための個別指導を行った。他に生徒がいなかったため、落ち着いて作品を仕上げることができた。また、課題を理解するために、生徒Aがいつでも見ながら作業ができるように手本を近くにおいて作業をさせた。切り絵の課題は、難易度の違う30種類の課題から自分で選んで課題を始め、黙々と取り組むことができた。公募作品とデッサンの課題は、グループに分かれて作業をした。生徒Aは移動することができなかったため、生徒Aの周囲に他の生徒が行って作業をするよう机の配置を配慮し、取り組む場所の工夫を行うと、作業にとりかかることができた。デッサンの課題は、モチーフを見て描くことが難しかった様子で最初は描くことができなかった。そこで、生徒Aは教科書のデッサンを参考に作品を描いてよいこととすると描くことができた。このような支援の結果、自分で準備をして課題を始めることができるようになった(図1)。

(2) 生徒Bへの授業者の支援

生徒Bは、生徒全員に対する一斉の説明だけでは理解が難しく、授業に参加できない様子であった。また離席をしたり、周りの生徒に話しかけることが多かった。そこで、準備への支援をして早く課題に取り組むこと、苦手とする課題に対する取り組みを支援者と一緒に考えた。

第1に準備の支援をした。4月から7月までは、声をかけないと準備をして課題にとりかからないことが続いた。声をかけても準備をしない時は授業者が必要なものを準備して生徒Bのところへ持っていき、課題を始めるよう促した。生徒Bの様子を観察すると、課題を始めることができない理由が2つ考えられた。1 つには、理解に時間がかかり一度だけの全体への説明では理解することが難しいようであった。2 つめには、周りの生徒に話しかけていて説明を聞いていなかったため作業を始めることができなかった。そこで授業者は、完成作品を生徒Bのところへ持っていき、手順をもう一度説明して手元に手本を置いて作業ができるように支援した。声をかけないと授業に参加できないことが多かったが、10月のデッサンの課題になると自分で準備をして課題に取り組むことができるようになった。

第2に、課題の取り組み方の支援を行った。生徒Bは美術への苦手意識が強く、4月は授業中に授業への不満を口にすることが多かった。課題を進めるのが難しそうなお様子の時には、他の方法を提案したり、はじめから書き直しをしてもよいこととした。具体的には、以下のように授業参加ができるよう配慮した。1 つは、絵の具を使うことへの支援である。4月の色彩構成の課題では絵の具を使って仕上げたが、色を混ぜて必要な色を作ったり、枠内に塗ることが難しい様子であった。そこで、8月から始めた公募展の作品にはマジックペンを使って仕上げてもよいことを伝えた。すると、下書きの線から色をはみ出して塗ることなく仕上げることができた。2 つめに、場所への支援を行った。気になることがある

と離席したり、他の生徒に話しかけてしまうので、生徒Bが落ち着いて課題に取り組むことができるよう、座る場所は自分で選ばせた。また、机の配置も課題にあわせて自由にさせた。3 つめには、書き直しや課題の変更をしてもかまわないことにした。ほとんどの生徒は1枚の画用紙で作品を仕上げることができる。しかし生徒Bは何度か消しては描きなおすが、それが続くとそれから作業が進まなくなる様子であった。生徒Bが自分から、新しい画用紙でもう一度描きたいと言ったので何度か渡して描き直しをさせると、作品を仕上げることができた。公募展の作品は3種類あり、それぞれが選んで課題に取り組んだ。生徒Bは最初に選んだ部門でいくつか下絵を描いたが、気に入る作品ができなかった。他の部門に変更したいと希望したので、変更を認め、書き直しをして仕上げることができた。このような支援の結果、授業者と生徒Bの信頼関係に変化が見られた(図2)。

(3) 生徒Cへの授業者の支援

生徒Cは丁寧に作品を仕上げることができるが期限までに終わらせることが難しかった。理由は、主に3つ考えられた。第1に、生徒Cは授業者に認めてもらうだけでなく、自分でも納得しないと作業を進めることができないようであった。第2に、より良い作品を作ろうと何度も書き直すためであった。第3に、題材を選ぶのに時間がかかったり、題材を変えて書き直しをしたためであった。そこで授業者は、支援者と話し合って以下の支援を行った。

1 つめに、残り時間数を意識させるために、授業の最初と最後に残りの時間数を伝えた。今日の作業目標を明確にし、目標まで進まなければ放課後に残ったり、持ち帰って仕上げるよう声かけをした。また、他の生徒の進行状況を伝えたり、他の生徒の作業の様子を見てもかまわないことも伝えて自分の作品と比べさせた。最初は授業者に促されて授業時間外に作品に取り組んでいたが、デッサンやドライポイントの課題では期限に間に合いそうになかったので自分から持ち帰ってやってくるようになった。2 つめに、作業の進め方の工夫をした。作品を作る過程で少し難しくなる点もあるが、作業工程が少なくなる他の生徒とは異なる方法で取り組ませた。3 つめに、出来上がった作品に評価をすることはもちろんだが、作品の制作途中にも評価を伝えた。生徒Cの作品は他の生徒にとっても手本となる部分が多かったので、授業の最初に紹介した。また、授業者は生徒Cからの質問に対して答えるだけでなく、安心して描き進めることができるよう、良くできている点も同時に伝えて自信を持つことができるよう支援を続けた。その結果、IV期のデッサンの課題からは授業者が声かけをしなくても自分で工夫して提出期限に間に合うよう課題を制作することができた(図3)。

(4) アンケート結果

ドライポイントの課題最終日の授業時間に授業アンケートを行った。質問は、Ⅰ「先生の説明で課題の内容がわかった。」、Ⅱ「課題に楽しく取り組めた。」、Ⅲ「満足する作品ができた。」の3問である。①色彩構成、②風景画、③切り絵、④デッサン、⑤ドライポイントの5作品を生徒の手元においてアンケートの記入をおこなった。評価は、「そう思う」「ややそう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5つの尺度である。それぞれの質問の下に自由に記述できる欄を設け、そのように思う理由を記入することができるようにした。

初めに生徒A、B、Cの3名の結果を図4、5、6で示す。

生徒Aは、ⅠからⅢの質問にすべて「どちらとも言えない」と答えている(図4)。課題が得意かどうかの質問には、風景画・切り絵・ドライポイントが得意であると答えている。

生徒Bは、Ⅰの課題の理解について、風景画以外は「ややそう思う」であった。風景画は「あまりそう思わない」で、どこを描くのか絞り込んで描くことが難しかったようである。Ⅱの楽しく取り組んだかという質問には、どの課題も「そう思う」「ややそう思う」のいずれかであった。Ⅲの満足する作品ができたかどうかの問いには、4月から5月までの課題については、「そう思わない」であるが、6月からの切り絵と11月からのドライポイントの課題では、「ややそう思う」との答えであった(図5)。

生徒Cは、Ⅰの課題の理解については、すべての課題が「そう思う」であった。Ⅱの楽しく取り組んだかという質問には、デッサンは「ややそう思う」だが、それ以外は「そう思う」である。Ⅲの満足す

る作品ができたかという質問には、切り絵とドライポイントの課題は「そう思う」であった（図 6）。

選択者全員については、ⅠからⅢの質問について、「そう思う」「ややそう思う」と肯定的に答えた生徒の割合を 5 つの課題別に示した（図 7）。Ⅰの理解度に肯定的に答えた生徒の割合は、Ⅱの楽しく課題に取り組んだり、Ⅲの満足できる作品ができることと関連していることがグラフからわかる。風景画やデッサンなどそれぞれの視点で描く必要がある課題は肯定的に答える生徒の割合が低く、切り絵やドライポイントなど作業の割合が多い課題は肯定的な意見が多かった。

全体と生徒 A、B、C との関係を見てみると、生徒 A は、いずれの質問にも「どちらでもない」と回答しているが、得意か不得意かの問いには、切り絵とドライポイントが得意と答えており、他の生徒と同様に作業の要素が多い課題が取り組みやすかったと考えられる。生徒 B に関して全体と比較すると、課題の理解に関して風景画の理解が低いが、どの作品も全体と同じかそれ以上に楽しく課題には取り組むことができている（図 5、7）。切り絵とドライポイントの課題は、全体の平均より満足できる作品ができたことがわかった。生徒 C は、いずれの質問についても全体に比べてよい結果であった。満足できる作品ができたかの質問については、全体と同じように色彩構成、風景画、デッサンの課題が切り絵とドライポイントの課題に比べて低かった（図 6、7）。

4 考察

(1) 授業者と支援者の取り組み

安心して学ぶための支援や主体的な学習に結びつく支援など生徒の主体的な授業参加に効果的であった授業者と支援者が考えた支援を以下に示す。

安心して学ぶために有効な支援は 4 つあった。第 1 に、場所の支援である。自分から移動しない生徒の周りに他の生徒を移動させて学習中に孤立しないようにしたり、自分で集中できる場所を選ばせた。第 2 に、準備や片付けの支援である。課題を始めることができない生徒は、授業者が準備をした。第 3 に、集団が苦手なことへの支援も行った。そのような生徒には準備や片付けを休み時間にさせた。第 4 に理解への支援は、作品例や手順を説明したプリントを手元において、課題の説明を個別に何度も行ったことであった。

自発的に学習するために効果的な支援は 2 つあり、1 つは自分で課題を選んで取り組ませたことや、授業者が事前に用意した準備物にはなくても、生徒から欲しいと言った道具を追加して生徒の考えを大切に作業をさせたことである。

生徒の有能感につながる支援としては、授業中の作品制作の途中にもできた作品の良い所を伝えたり、授業以外で生徒と関わることがあった時にほめた。

このような支援のために行った授業者と支援者のかかわりも有効であった。支援者が授業者から聞き取りをしたことや支援者が見た生徒の様子などをまとめて授業者に伝えたことも授業改善に役立った。また、支援者が授業者から聞き取りをして作成した「コミュニケーション記録」や、チェックシートを用いて行った生徒の実態把握など生徒の様子をまとめて授業者に伝えたことも支援を考えるために必要であった。

(2) 授業改善の取り組み

長尾の「教育支援の 7 つの工夫」³⁾ を参考に必要な支援を授業者と支援者で考えて実施し、主体的な学習参加に有効な支援のあり方を全体としてとらえることができた。

第 1 に、興味関心に合わせた「学習内容の工夫」があげられおり、難易度や内容の異なるいくつかの題材から自分の好きなものを選ぶことができるようにしたことがこれにあてはまる。切り絵の課題は、以前の美術選択者が作った題材もあったので生徒にとって親しみやすく、課題をよく理解することもでき、楽しく授業に取り組めたということが 12 月の授業アンケート結果からわかった。

第 2・3 に、「集団構成の工夫」と「学習の場の工夫」があり、座席場所を自分で決めたり、一緒に作業をする人数の配慮を行ったことがあてはまる。この支援により、出席しても学習参加ができなかった

生徒 A が自分で準備して課題を始めることができるようになったり、周りのことが気になって課題を始めることができなかつた生徒 B が落ち着いて課題に取り組むことができるようになった。

第 4 には「教材/教具の工夫」があげられており、生徒に合わせて必要な道具を用いて課題を完成させた。生徒 A に道具の支援をすると、次には自分から作品を仕上げるために必要な道具を授業者を用意して欲しいと言うようになった。

第 5 のいつ・どんな言葉を必要に応じてかけるかの「かかわりの工夫」については、課題を始めることができなかつた生徒 A、B への声かけや不安な様子で制作を続ける生徒 C への安心して自信をつけることができるような授業者のかかわり方により、少しずつ自分から課題を始めることができるようになったことがあげられる。

第 6 の「提示の工夫」は、準備物を区切っておいてどこに何があるかわかりやすくしたり、作業全体の流れや今日の目標をいつでも振り返って確認することができるように口頭で伝えるだけでなく黒板や教科書を詳しく説明したプリントを用意した。支援者が授業の様子を観察していると、生徒が手元にプリントを置いて課題を制作していたり、黒板には貼ってある例や手順を何度も確認している様子を見た。生徒が自分で考えて制作を進めるうえで有効な支援であったと考えられる。

第 7 の「成果のわかる工夫」は、コミュニケーション記録を残すことと、授業アンケートをしたことである。コミュニケーション記録を続けることで生徒の変化がわかり、必要な支援を授業者と支援者が協力して考えるための資料としてたいへん役立った。その結果、生徒の主体的な学習につながったと考えられる。12 月のアンケートでは、自分の作品を見ながら生徒自身が自己評価を行い、自分の成果を振り返る機会とすることができた。

(3) 授業アンケートからみた今後の授業のあり方

理解しやすい切り絵などの課題は、理解して自分で考える必要のある他の課題に比べてより楽しく、満足できる作品となった。つまり授業内容を理解することが主体的な学習参加の基本となっているということが確認できた。そのためには、生徒の実態の把握が欠かせない。授業者と支援者が協力して生徒の様子を記録し、生徒の授業参加を主体的にするための支援を続けたことが全体としても楽しく課題に取り組むことができた生徒が多かった結果となったと考えられる。しかし、満足できる作品を作ることができた生徒の割合は少ないので、今後は満足できる作品作りへの支援が必要である。

生徒 A は課題が得意か不得意かの問いに、全体と同様に切り絵とドライポイントが得意と答えた。生徒 A はすべての質問に「どちらでもない」と答えた(図 4)が、今後は他の生徒の作品を見る機会をつくり、自分の作品についても表現する力をつけることがより主体的な学習参加につながると考える。

生徒 B は、色彩構成・風景画・デッサンの課題は作品の満足度が全体の結果と同じかそれより低い(図 5)。この 3 つの課題のうち風景画以外は課題の理解はできたが、生徒 B にとって理解してそれを作品に反映することが他の生徒よりより難しかったのでこのような結果になった。授業者と支援者は離席したり他の生徒と話をしてしまう生徒 B に対して、課題を理解して集中して授業に参加するための支援が中心であったので、今後はより多くの表現の仕方や課題例を提示し、自分の思いを描き表わすことのできる支援を増やせば作品の満足度が増し、より主体的な授業参加につながると考える。

生徒 C は、全体と比べてよく理解して楽しく課題に取り組むことができたが、他の生徒と同様に自分で考えて仕上げる割合の高い課題は満足できる作品とはならなかつた(図 6)。自分の思いに近づけることのできる表現方法への支援が必要であった。今後も具体例を多くみせることでより満足できる作品を作ることができると考えられる。

主体的に学習することができる支援とはなつたが、アンケート結果から生徒自身が努力したことがたくさんあるにも関わらず、満足できる作品ができたと思つた生徒の割合が少ない(図 7)。今後は、生徒が毎時間記入する本日の目標を立てて、それに対する満足度で評価するワークシートを作成して自分自身が後で振り返って努力したことがわかりやすいようにしたり、生徒の作品を掲示することや授業で紹介することにより他人の作品の評価をして自己評価の力を高めるような工夫も必要であると考えられる。

本研究では、他の生徒よりより困難を抱える生徒への支援について検討し、実践した。クラス全体で授業理解と楽しさがよかった切り絵の課題の時に、3名の対象生徒もそれぞれの抱える困難さが少しずつ良い方に変化を始めている。対象生徒も安心して授業を受けることができるようになるにつれ、対象生徒への支援はクラスの生徒全体にとっても役立つこともあり、全員が授業に取り組みやすくなった。「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」⁴⁾に子ども一人一人の教育的ニーズを把握し、支援を行うことはすべての子どもにとっても、良い効果をもたらすことができるものと考えられるとあり、本研究の個別の支援が結果として全体への支援ともなったことと一致する。

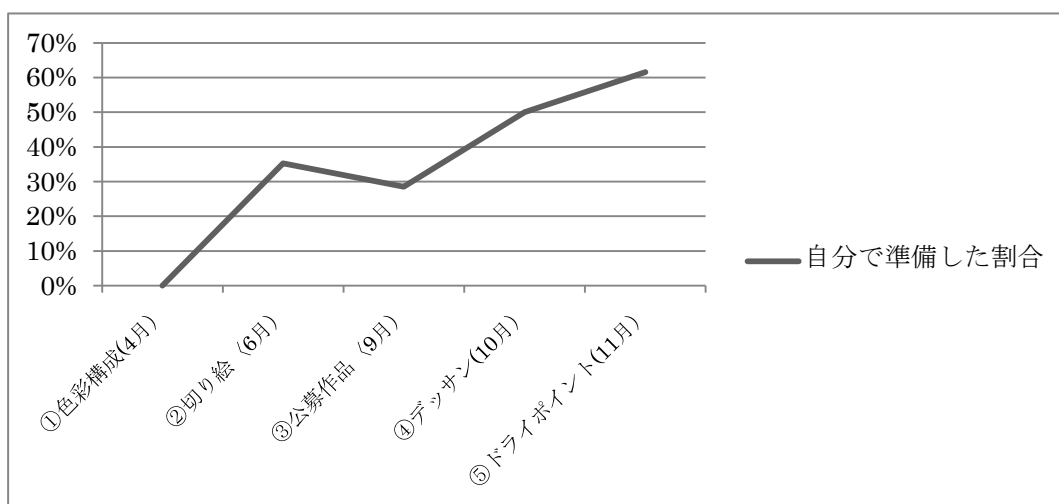


図1 生徒Aが自分で準備をして課題を始めた割合

レベル	評価尺度における生徒Bの姿
3	自分の思いを授業者に伝える
2	授業者に返事を返す
1	授業者の声かけに応じない

レベル	評価尺度における子どもの姿
3	自発的に、締切日までに提出する。
2	授業者の指示により、締め切りまでに提出する。
1	授業者が指示をするが、締め切りを過ぎてから提出する。

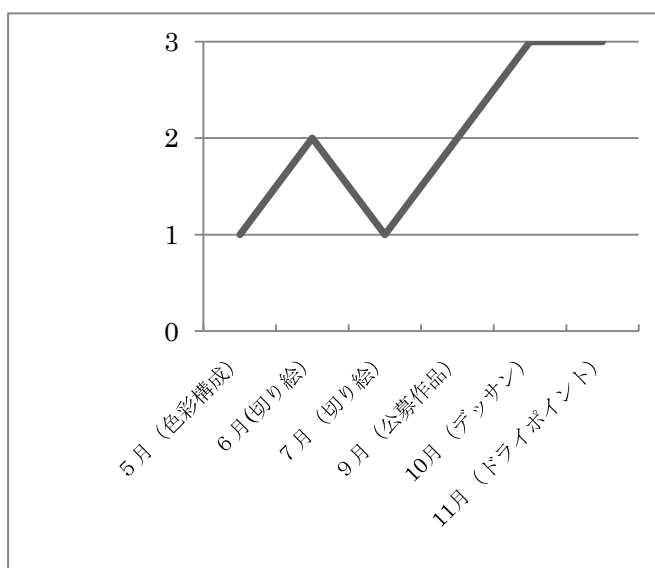


図2 授業者と生徒Bの信頼関係の変容

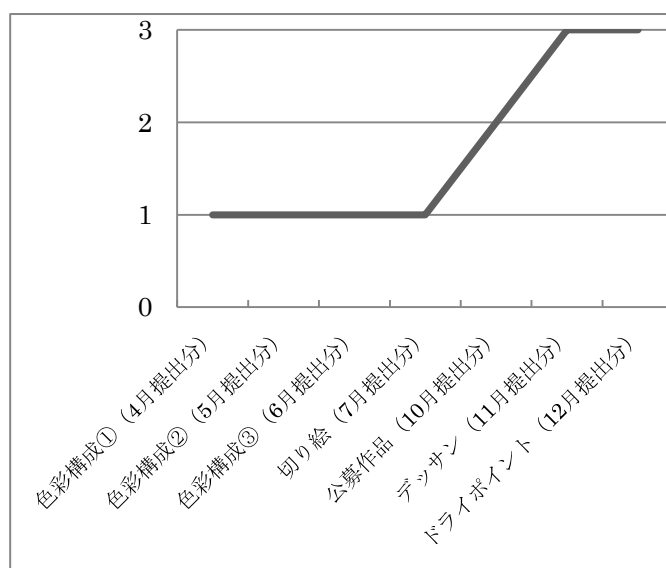


図3 生徒Cの課題提出の変容における評価尺度

図 4、5、6 のアンケート結果の評価尺度

「そう思う」: 5 「ややそう思う」: 4 「どちらとも言えない」: 3
 「あまりそう思わない」: 2 「そう思わない」: 1

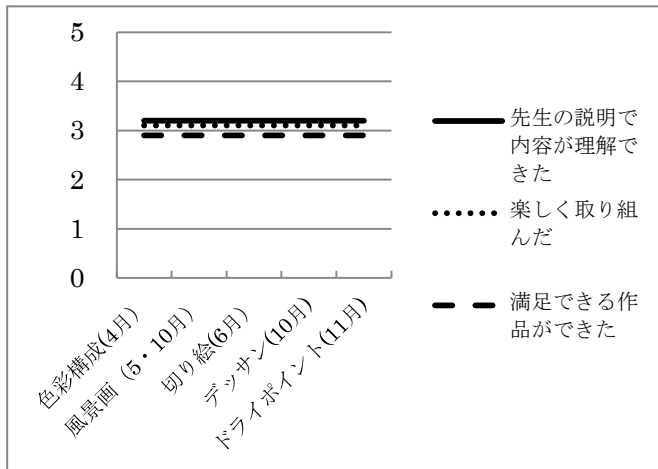


図 4 アンケート結果 (生徒 A)

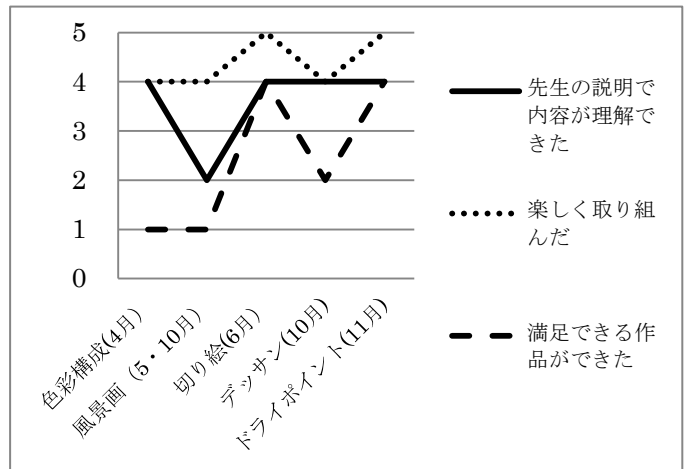


図 5 アンケート結果 (生徒 B)

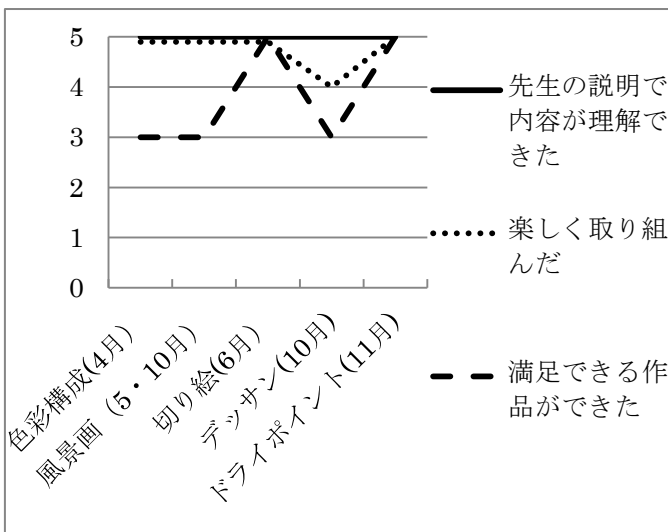


図 6 アンケート結果 (生徒 C)

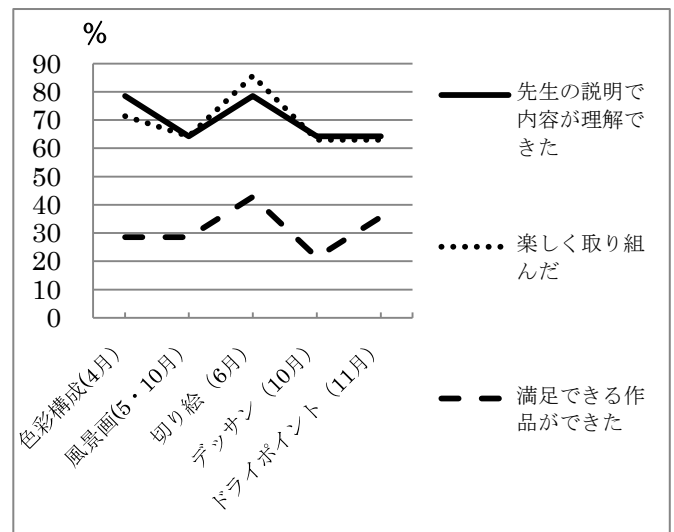


図 7 課題の理解度と取り組みの関係

(生徒 14 名のうち「そう思う」「ややそう思う」と肯定的に答えた生徒の割合)

【参考文献】

- 1) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課(2012)「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf
- 2) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2012) 平成 23 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する研究」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/_icsFiles/afieldfile/2012/09/11/1325751_01.pdf
- 3) 長尾秀夫(2003) 療育に関わる各専門家の考えについての研究 (第 9 報) 第 4 回公開講座「学習に困難をもった児童の通常の学校における教育支援」のまとめ, 65-67
- 4) 文部科学省初等中等教育分科会 (2012)「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2012/07/24/1323733_8.pdf